

2019年度臨床倫理学応用コース 実施報告（佐藤恵子）

「京都大学を拠点とする領域横断型の生命倫理の研究・教育体制の構築」プロジェクトでは、京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）の協力のもと、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学応用コース）を2019年3月9日に京都大学イノベーションセンターにて開催しました。

本コースは、2015年に実施したパイロットコースに続いて2回めで、目的は入門コースと同様で、臨床上の問題について「患者の利益に資することは何かを考える、適切な方策を立てる、方策を実現する戦術・技術を考えて実践する」ために必要な知識やスキルを身につけることです。現場の医療者や、支援する人達のそれぞれが、患者の空間を観察し、ステークホルダーの価値観や感情を把握し、方策を立てて行動することで、患者や家族、医療者が納得し、居心地のよい環境ができることを目指しています。

プログラムは、午前中は、重症の疾患をもつ子どもの治療をどうするか、午後は、ALSの患者が呼吸不全になった際に呼吸器はつけないと言っている場合にどう対応するか、という難しい内容を取り上げ、講義を挟みながら、臨床倫理コンサルテーションチームとしてどう考え、どう助言するかについて検討してもらいました。

受講者は日本各地から41名、教育者やマスコミ関係の方、医療者は現場で活躍する方や臨床倫理委員会に関わられている方など、学生さんも、医学・哲学・倫理学・法学等の各領域から、さまざまな背景の方が集まりました。講師も、児玉聡（文学研究科）、服部高宏（京都大学国際高等教育院）、佐藤恵子（医学部附属病院）、ファシリテーターには立場貴文（文学研究科）、宮地尚子・深川良美（医学部附属病院）、鈴木美香（iPS細胞研究所）に参集いただきました。そして、小児の事例では、道和百合（群馬県立小児医療センター）、ALSの事例では、伊藤道哉（東北医科薬科大学）に講義と解説をしていただき、充実した内容を提供することができました。

グループディスカッションも活発に行われ、問題意識を共有している人達が異なった立場からの意見を聞いたり、意見交換すること自体が重要であることが確認できたのはよかったです。しかし、倫理原則や問題の考え方を習得しているという前提で、基本的な理論の説明などを省略したこともあり、「患者の利益をどう考えたらよいか」「治療の中止・継続を考えるときの要素は何か」などがわかりにくかったこと、1日で2つの事例検討を予定したため時間がタイトで解説や議論が十分でなかったことなど、改善すべき課題も多々ありました。講師としての私も、問題を考えるための根拠や道筋をきちんと示したり、それを助けるツールを提案できたらよいのではと思いました。

セミナー全体としては、熱心に参加して下さった受講生のみなさん、講義にいらして下さった先生方、スタッフのみなさんのおかげで、充実した内容になったと思います。心より御礼申し上げます。

また、今回は、運営を京大オリジナルさんをお願いしたのですが、事前の準備から当日の運営までお世話くださり、感謝しております。運営を外注したため、受講生のみなさんには「すっぱムーチョ」166袋相当の参加費をお支払いいただくことになりました。参加費に見合ったセミナーであったかどうかは不安が残りますが、今後はそうなるべく、精進したいと思います。